

徳山ダムを訪ねる(2)

9月25日、徳山ダムでダム湖に水をためながら安全を確認する試験湛水(たんすい)が始まった。計画が持ち上がってから半世紀を経て、水源の揖斐川が初めてせき止められた。テレビで報じられたダムの湖底を見つめる旧村民の表情が忘れられない。当日の朝日新聞は、「矛盾満杯の徳山ダム」という見出しで、「今になって住民対策が再燃し、水の使い道もめどがたたないなど、ひずみが次々と噴き出している」と指摘する。



それから1ヵ月後には、徳山小学校に向かう橋も半分ほどが水に沈んだという。今はさらに水かさが増していることであろう。今後1年半かけて貯水と排水を繰り返して、本格運用の予定という。小学校は満水になると、水深90mの湖底に沈む。



徳山ダムからの帰りに「徳山民族資料収蔵庫」を訪ねた。徳山の山村生産用具などが一杯並べられ、貴重な歴史的資料が保存されていた。それだけ歴史のある村であったわけだ。また、写真のように徳山小学校などの看板も展示されていた。そのコーナーに旧村民全員の顔写真が掲げられていた。複雑な気持ちで写真を眺めて、収蔵庫をあとにした。



(2006年12月6日 記)